補像
優雙言

花鳥英雄錄

五輯

五

遠
2599
35-33

遠
2509
35-38

復讐言出石見英雄録第五輯巻之五

南海　玉藻主人編次

父女相依て窟穴を托せ
公私異議骨肉を疎まむ

再説阿片元青ハ年屬不義の榮利を恥とせず。人を瞞ち甘ふ媚て。松永彈正ふ受し月俸と。はゝ曩ふ牧野廣濤義行。おのゝ女覓を餌ふせしより。開扶助ふ死ふあ〜ぶれども。ム奢も亦酷かりしふ。迩屬松永が筭宅ふて。誤治方よて病人の死ること五六個ありしとき。元青ぶ那筭へ出入るゝハ。勿論ふ月俸をたへ停められ。右同じく。開聚語蝨くも那這ふ听ふ。ちゝば茱を請ふの自然兩夜の星ら秋終ふ野邉の虫ゝ音一向ふ送り少あくなる程ふ然しも

元亨が縦横遊説の辯舌も。権謀術數も。一霎ちそあれ。終ふ行ふ所由も。多く形りてなれば。家の勢衰へ〳〵貧乏病を癒治ふ。盛ふ術形紀金銀花愛さ紀名ある黄芩ふ。呉りて実り忘やく。听り癖めん川蔕を。増許う為る頭痛れ。病して熱深念をるふ。怠くも人徒心の離れ紀て。昨の船方を仇とその尿まで。賺を責りて四面ふ。攻来ふ敵の駿〳〵紀。俺年来覚てえある本支以て。幾く人を殺せど。修錬の奥秘血を見せねでや。這ヒまでも恐ぬい。死物狂〳〵やいふべき適勇士の面貌其勢ひ當り難かり。現ふ翔鳥をうてい射るふ射られぬ。弓取の身ふをあ〳〵紀ど俺のまさ。坐食ふ去てい居ふ坐られぬ。為種兵糧の貨殖の与紀。億れば則ち屢中ず〳〵銭炮の硝茱さへ百計も竭さるうへい。保堪ぬ紀籠城るうば。三十六計走るふ若ぜ。逃れで

近曾一演史家の説を听〳〵ふ。等持院贈左大臣尊氏公ふ都落とて屢逃ぬひ〳〵大将ふれど。丹波ふ入て大業の基を。開紀ひとらや。迹くい慧林院殿将軍家（大納言義植卿）も一番丹波ふ敵を避て。忍ちふ京都をべ。元も復〳〵て。ふん志を遂ぬ。良将と形〳〵ざれば。良醫さ添べ〳〵ふ古昔の縡ふ。芒を反して今世い名醫さう紀ば名将達ふ。跡を学びて俺りまさ。都た為て冊波ふ下向をるれ。ふば適終ふい一旗抗げて。會誓の恥を雪ぐ。段もあるべ〳〵。ム折ふ乾木敢四と夫低勘三を。病所ふ留めて保貴とせば。硫黄ふ紀ど鷹眼を。光らを敵をも瞞くべ〳〵。軍師の変断爰ふあり。と心算をる折ふそあ。這年永禄八年の五月十九日京都猛可ふ騒擾ふて。不意大変出来ふ。多管領三好家の権ふ。ふて三老臣と呼れ。三好日向守長賴。山城守保長岩

就主税介祐道。及松永彈正久秀が軍を起して。將軍の御所を襲ひ。義輝卿を弑し奉りぬれば都下の良賤惶遽怯れて。肝を潰し魂を失ひ。什麼ふ形ち狀く江湖上あの〜んと思ひ阻みて安堵心なりけり。世の災禍を幸として。財を致すの雪ぐらで。俺が屋ふ積る宿債の山を都の遺裏悄と栖処を夜脱まつ。濁〜く起りや堀川の跡ハ野と荒れ山國の牧野ふ寓方を憑んと丹波國へ下り來て。殿閣が家ふ呼門れば殺若濕ハ居ふ出ぬ義行も駭くまでふ。這ハよくも諧を〜〜ち歎びて逢ひどふ。元青ゑ先度傳が恙ふ死を賀し。却いひるやう思ひ切もあり。愚老が這番下ふハ種この情由侍り。既ふ蚤く聴せみひろん。都ふゑ恁る大変侍り紀。と一五一十を話說りて且いひるハ。酒家年屬那熟官ふ。松永ぬし

の弟宅ふ出入ぬるハ心よりも切ぬ。推辭ふ術のなきうしと。生平歎きく又慨やしくて。悄々地ふ嘆息ぬる由ハ女岩濕もよく知て侍り。然るふ去年の春の始ゑ京師某の坊ふ仏甲と呼侍く一個の似非醫あり。名利を貪る本性の譬バ蓼食虫の像ふ最可畏松永ぬしの威勢をバ艶慕ひ。百端ふ計りて那弟宅へ進趨せしが。這奴太く愚老を媚嫉て。左右ふ讒きりしバ久秀ぬしゑを信容て。酒家が進趨せるあとを免さじ。月俸をも禁免られハ倒ふ年屬の本意ふ稱ひし。没怪の幸ふ〜〜あこけり。と悄ふ喜び侍り〜ふ。那人固り腹歹ふよ。那似非醫奴が執念深き。酒家が技の都下ふ通く行るゝを。飽で猜く思ふの餘り。尚いりまハ說慫慂ふ〜ん。松永ぬしゑ隷して都下の街毎。豪富の各家へ徇示せ若ふ。阿片元青ゑ

酸湯
左馬允と見ず
はらばも
角口をみし
義忠
義行
遊二郎

罪あり。禪正が第宅へ出入せるを停や者と。迹るを他ふ親み睦ぶ者ゆゑ。ムハ久秀を蔑如よせる形り。互く會意ず後よ悔そと言せ。諸人大家鬼胎を抱ち。後来の崇を阻みて病ありても。洒家を請迎ふ。りのみ知ずゑ。左り右りて年月を銷しよ。星霜が互きふや。苛酷く窮鬼よ貪縁れて。都の立在もあり難うれど。債ある分の悪しい居妻の人も。洒家が挙動ふ大家斉一く眼児を着ふ折れば。怎ふも徹ずゑ。普光院殿（足利家六世の将軍。左大臣源義教公ゑ。嘉吉元年六月廿四日。逆臣赤松大膳大夫満祐入ゑ。性異が与ま。赤松が第ゑて殺せられゑ。）以来未聞ある這回の大変ふ。甲も乙も愕怯きて逃亡料理やら自家準備ふ他を省べ知ず遑ふ知を幸ふ苛くして。早身ふして脱れ来りぬと。実捗鬼ふ雑て。古方後世畏ゑ胸の配剤舌三す説瞞めり。分勝ゑの便着を這里ふ求ゑ。義行い性温厚の人ゑれば。听く頻よ頷知て。室町御所の大変い快く這四下へも風幸して。絶驚ふ。ゑん繹稟も倒惲りあり。且元青老の下られ。現痛ま知落命。ゑれども幸ふ運あり付り。先心を安靖て這里ふ留まり。静ふ繹を計ふぞ要ゑれ。俺ま做ん容もあれと慰めて。元青を家ふ留ん。岩瀑が子舎ふ遠かり。一個の編室をゑて他が憩所と定め。いと憑くゑの者ゆゑ。元青い轍の鮒の池ふ入り。浮屠ふ骨の出来ぬる心地して。ちも教び。是より牧野が家ふ寓客と為りて。女岩瀑共侶ふ大かさ形り。王人ふ媚て陪堂と為り。生平よ義行をば大老爺と稱えて。或と知い棋敵と為り。或と知ゑ詮客と形りて。変を上り笑を献じ。変化自在ふ憨ゑ。馬潑六態ふ義行愈愛ゑ。を。岩瀑が提撕て甚慶よ。壁訴訟やきさりん幾日もゆゑで義行い。

比叡江の村稍尽処ふ。人の沽却んとらふ。福小なる白屋を購需給。家伜
ゑこど第圍からば料理て。小厨一名を幹奴とし元青を移す栖せし
ほどふ。里民们元青を信るもあり。又信いぬりけもあれど。牧野廃湯が
飽で迄顧の醫ゑれど。他よ強親して外よ醫を索ん。はもが形ろ
とほふまぞ。那這より薬を索ん者も少みゝ。絶が元青ハ稍く所因を
得らりける。這當下左馬允義順ハ五月の上旬より。重病疲よ羅ひて臥
程ふ。源二郎ハ義父の病を看護の與ふとて。鳥居の眼代所ふのゝ在
けるが。六月の下旬ふらふよ義順が病強半癒りて。京都の一大椿事
公方義輝卿を。逆賊们が与ふ弑せられて。薨ゑひしと始て听ゑ。大よ駭
玩歯を切りて恨み歎きるが。緯もでるよ六月の菖蒲十月の菊ふなり
ふたるよ。大厦の將よ頽んとるを一木のよく支ん所ゑんや。故將軍
の弟君一乗院御門主覚慶。ゑおん心捷く逆徒们が追討兵を避て。
おん行蹤を知らぬ。風声せり。迹ば這公必らず。那國の諸侯よも憑
せみひ。復讐義兵のおん旗を揚ゑふべ。要ゑをゆれと思ひ返しゝ。
腹心の若黨们を。悄々地ふ那這へ遣やて。ムおん所在を探り張ゑせ
しふ。後よ若挾の武田家ふ。潜び住ゑる由を確如ふ听知りて。悄ふ
那おん所在へ屢金帛ゑるどを饋献せて。旗次のおん資助と做ける
あと。戦前より美濃へ入らせゑふ時までも。怠らば志を竭しぬ。井の
みゆらぬ桑田郡山國荘ゑる政所領の貢税をも。後年義昭卿
上洛ゑふ付まぞ。抑へて系統へ納ばらるゝど。三好家の三克及び松
永が暴悪形るも。緯紛冗ゆ時とらひ。大事の前の小変ゝゑ思ひけん。
牧野を追討の噂さへ。ゑくてム儘うち過ら。這皆後日の説話ゑを。

筆の勢ひ止難くて。連綿く這里ふ録写せり。却て牧野義順が病
患の癒はしいと。生平の健なるふ反て拙バ。無れ籠て居たりし間ふ。添
二郎も比叡江の里へい帰らびして。尚留りてぞ在ふん。有一日殿衛義
行も身の病愈りぬる歎びを演んとて。本州の名産と聞えさる陶器
の桑酒ふ。俺多親ら網を下て獲せし東西ありとて。年魚一籃を齎
し来て。病起の徒然なるを。諧慰ちめて序よしとや思ひけん。粤ふ始て岩
瀑が父阿片元青が縛を語り出。且岩瀑を以て継室ふせまく欲ち情由
を譚ふよぞ。左馬允も呆ふまでふ腹立ちて思ひ眼を睜うて。這ハ
阿兄とも覚えぬふ最朽惜ちふを宜ふりの義。ん多ふ狩ひをりて
在下が賢人態て稟ふも心苦くて憚ある縛ぞ。今番室町殿将軍義輝
不意ふ。逆徒の与ふ為ん多ありしを。怎麼思ひ多ふぞや。在下病ありせ

バ。波多野赤井細見内藤仁丹波一國の将士を語らひて。逆徒ども
誅罰の軍を起せり非如草身形りとも都ふ上り。縛就とも否ぜる。
命を捐て逆賊三好岩就松永を討て先将軍のおん寃を霽し奉
んあそ臣ふる者の大節ふいでや。悪ち哉今乱世の習俗ふて本州の諸
将士も各自營私利をむさぼりて。封疆々々を守りて他を張ひ自家を
肥せんと利ふ走りて義を外ふ。今番の一大禱事をも知らぬ貌
て賊徒を誅伐の公論大義を唱ふる者もなしハ那们が逆威ふ恐る
もの欺恥を知らぬ欺徒憑げふ人間形ぞバ左さ右さふ思ひ屈して。
心を砕く義順が病後の苦悩を猜しみいぞや。家尊大人司馬分義則の
生平ふ咱家小身微禄形れども。一荘の人ふ恐れ敬れ剣へ波多野
赤井が下風ふ立ぜ世々六位布衣ふ叙任せるくふ。祖先の餘澤と

ゐいひあぐら。皆是君の鴻恩ぞかし。ムホ就て云〻と宣ひ。庭訓い今も尚耳ホ殘りたれ。然るを知禀さんや。恁る機會ホ憚りあく。継室の沙汰あるど。苟且ホも他人ま听ぜ爲うもあらじ。這いそぞもの夏あらん。牧野い尾張國より出て斯波家の支族あり。斯波ハ八幡殿義家より八六世の孫足利家ホい第四世ホて。又室町殿將軍の御先祖。等持院殿氏のあん中務太輔ホ任ドう。より出て。將軍家の門葉ま い畠山。桃井。吉良。今川。仁木。細川ホ亜一奮族ま。て。渋川。石堂一色。上野の諸家の祖ホハ大兄あり。家氏下総國香取郡大崎ホ住ホひ。子子家宗始て斯波大崎と號し。其孫高經ぬ。

（足利太郎と称せ。後五位下足利宮内少輔の長子家氏ぬ。尾張守と為る。後に尾張國前を領せられ。嫡家九世ホて文明中ホ家老

大崎世襲○後に大崎ホ陸奥守詮時○左京大夫詮家○左京大夫政兼○左兵衛督義利○左衛門督義信実○伊達稙宗○三男あり

家上世襲○右京大夫ホ家○宗上修理大夫詮ホ○家上修理大夫詮家○右京大夫義

ある甲斐文朝倉们。与ホ滅びねれども。一族の大崎ハ高經の弟ぞ。足利伊豫守家兼ぬ。尊氏將軍の命を受て。陸奥の管領ぐ。那國ホて南朝官軍の大將北畠顯家卿と戰ホて戰没あり。延元元年夏六月十三日　嫡子直時以来八世大崎家今尚奥州ホ連綿ぐる諸候之享年四十九歳

又羽州の最上氏ハ那大崎直時治部大輔の季弟ある。足利修理大夫兼頼延文元年。南朝後村上天皇の正平十一年ホ出羽國の按察使ま補せられ。八月三日ホ家上郡山形一荘ホ村山郡ま下向あり。ム子右京兆直家を。最上の舘と稱せしより。最上家十世是亦東北の雄藩ぐて。今治部大輔義守ま武威ま也く盛ぐと听り。抑俺家ハ這ホの同宗ぞれば。今微孫卑官あるも。列國大藩の陪臣ホ同ドぐ。九婚姻ハ両家の門地相敵をと。ぞ要とも形れ。那阿片元青とやらんが素生を怎麼ある者ホんぞや。在

春○修理大夫義秋○治部大輔満氏○左衛門佐義淳○右京大夫義定○修理大夫義守

下既に聞くることあり。他も年属都に在て。松永久秀に媚諂びし。似非
醫師にて但馬國出石より出しものとハ聞ど出處不定の浮浪子なり。
恁いへどもよく驕傲りて咱門閥を鼻に掛け人を卑むる。俗子の見とな
召しなひそ。門地相応ぬ配偶ハ畢竟私情にて祖先を辱かしむる。這亦
不孝の罪なるなれバ言を憚まで諄々しくも飽まで身も知なし。俺家の
宗室支族の家系にへ賣弄聞訴に及びられ。倘那岩瀑を継室とし
なバ。義順なハ嫂とし。新月源二郎們まで母と呼せて仕へさせなばおん心
なそれや。最苦々しきことなれ。いへまでも妾にて役使さんハ怠ることも
べし。将軍家政所御領の眼代なる。牧野が嫡々源二郎に。阿片元青が女兒
を阿嬢なりなどハ。義順が弄を倣せ侍らド。且元青ハ旧ハ松永久秀が門
飜なりしぞや。逆賊松永に由縁ありし者を。おん身舎藏て比賀江の村に。

栖らせなさんハ什麼縡にかぞや。在下今這莊の眼代なれバ。犬じもの渠奴
を。逐も放さんハ難からねど。そハおん身の與に妙ならぬ所なれバ如右
せぬなり。快く他を那里へも逐遣りなさばおん身忠義の心落つりと。
に原心ある案に。聚語やせられなひなん。快く追立へと睨る眼に涙托み
肝膽を披きて告る。苦口の諌言耳に逆へバ。義順も俯き勃として色を
変。室町殿のおん事ハ云に及ずぬ縡ながら。大名高家も手を束ねる
時の勢力ある医を。咱們が歎けどもとくが足らぬを甚麼にせん。まさ醫陰
の二流なる。四民の外なる所謂長袖者にして。農夫市人に都せバ。然ま
で卑む者ならんや。元青が松永に俸を受しハ。他が本意ならね縡ども。
醫を業とせる躬なきバ。推辞に術なかりしに。去年の春比始にや。他が
技の拙きを。猜忌ぬる他醫の讒言にて。那方より絶交して第宅へ

出入をるを停められしと噂ふ話りあれ然るを執念く憎んで鄙謗ふ
居法師を恐みて袈裟まで。といふも臆りる僻みあらばや。窮鳥
懷ふいれば獵者も捕ぜといへり。他が窮を逼りて。都ふ安堵りあり
難て。俺を憑て来りもれを。爭何強面くりの出べれ。況罪ふれ者を逐
べれや。和主病者てや恁口ふく。兄を窘め無礼ふ辭を極めく。
外聞ふ不忠不孝とせられど。ム躰も不弟の罪あるを知らばや。
今日より長く汝とも面を對せど。汝も亦ふ家ふ棄ぶべらぶ。源二
郎ふも目方伴ひ帰るべし。我一家児の縛い我隨意もるを。誰が什麼
ふせんと奇高く詈をども。左馬允い些る驚らば命兼りいひぬ
在下兄ふ背ける罪を得れば。家兄い父祖ふ負くの罪を。得させぬん
ぬそ哀しられ。源二郎がらへ。おん身の子ふて子ふ何らば。這ふ是裏

ふ家ふ居る人人。ふ禀て免ぢをる。牧野家の嬌嗣ふ。得こそ
ふ返ふ禀を屈じ。只得推り帰りぬべ。ん身父を欺ぢふならばや。什麼
にい。と執筆返ふ言返ぢれ義約ふ。ムつと可恩逼りしが。尚輸慳みる原
不減口ふ現他い既ふ和主ふ與へ子ふ。和主が一家児の進退い和主が隨
意。まて。俺一家児い俺信ニ。暇禀せ刀を把て座を起つ。どふ最前
より雪松い源二郎共倶ふ屏の這方より竊聞り。那方這方ふ意
を介て。有係ふ出も難らば。ぶ。楚へ難てや出んとせしを。義明快く顧
りて。目を以て佶と抑禁ふ。身を紀して玄関まで。送るを殿衛い見も
ぶらば。伴當の僕が庭前へ正ふ向晩し。暴やふ華金剛を踏响し。
夕陽ふ蘭笠を傾けて。遽ぶく帰りける。嗚呼世ふ妻妾を重んじて。
骨肉を疎むの。禍を延ぬい鮮ふ。必竟義約が多上ふ怠る縛

復仇英雄録五編巻之五
十
山名あうとちらう
金王小錬
石打力四郎
復仇英雄録五編巻之五
十一
牧野義順血戰
一方
山名執祐道戰
虎撃す

うあるムを續次の間ふ解釋を聞てりて敬言戒しとべし。

軍營の秋　公駕ふ從ふ

客窓の雨ふ碁敵を招く

迚バ牧野殿湯義彩ふ日属然許愚魯ふる人彩ふ〜ばら〜も。愛狐の魔障ふ〜浮屠家も説ふ情慾ふ溺れつ。墻の茨花ふ咲てムふ刺あるを知らで掃ちぬのミ彩ふ〜バ。兄弟墻ふ鬩ぐまぞふ義順が諫ふ悖りて任情ふ日を擇みて遂ふ磐瀑を推昇して正室と做るゐどに。隱れある屋敷縛彩ふ紙ば。迚き鳥居の里へ遠く听ふ〜ば義順夫妻いらち呆れ〜ぶ快く都ふありける姪の新月へ音信して此情由を告ふ報〜て汝が父ハ衒て信ふ正彩き縛を做ふべるムハ俺ふ祖先の墓も変て兄〜ふ彩ふ。紀彩ふ那礼の彩れば那岩瀑を継母〜ふ見ぞ。遮莫

汝〜孝心ふり。いふまでふ及ぶ彩ふ。苟且ふも父を恨みそ。只怠慢と。ふ〜ふ舎素てよ。俺们夫妻が什麼縛も互くいせ〜と細やふ去勝ふ是より後ハ源二郎ふ固く制戒ふ。比賀江の里へ彩ふ者ハ兄弟宛ら胡越のごとふ。隔遠り如ふ。源二郎ハ獨り心を傷ませつ。躯て養父義順ふ暴ふ屋敷ふ告示〜ふ情願を果さんふ丹後詣を做ちんと請け色バ義順左ふ右もとく允せ〜ば。源二郎ふ喜びて。心知ふ若黨雜色奴僕ともふ彩て三名を伴當ふて。這年の捌月より月次ふ外宮内宮の神廟及び。天橋山世野山成相の僧刹ふ詣ふ。義彩が与ふ弁懈怠を償ひ。且ハ俺情願ふ彩ハ生父殿湯ふ禍祓ふ。義父左馬允と捷く平昔の睦かり〜ふ復〜ふ〜。然禱ぎるふるべ〜。迚バ三伏の夏ふ暑と侶ふ長路の草茎濘ふ飛

埃いたれどゝ甑より起り湯氣とゝ見るべく。はゝ冬の日も徂徠稀なる山陰の雪ふも風に撓まぜして。両三年を累る海でふ。怠るあとも恢らぢり。忠孝垂二の壮士の武勇の魂い自ら蘖の時より知るとゝ。現ふ只過ゝ過ゆる東西い走ふ帆ふも地へ。等ね阳阴の疾く移りて。今義永録十一年八月の时候故將軍光源院殿左府義輝公のおん第。一乘院の御門主は紀ふ還俗して義昭と名告ゆひけるゞ。上野民部大輔清信ホをも、供ふて年屬江湖ふ落魄し。若挾ゝ留りまゝ越路ふ彷徨ゐへゞる。武田義統大膳大夫のおん姉夫ゆゞ城邑福小ゝて。大義を挙ふふ力足らゞ。左金吾日下部義景越前國主朝倉氏と。士馬精强の大諸侯ゆれども。柔懦ふして決斷ゆ。鬼ゝも角ふも时いまゞ到ら給どゝ。世のうき雲の晴やらぬ。雨ふや着ゆゝ美濃國ふ入せられ。上総介平言長を憑みゆひて。軍を起し

都ふ向ひゆゝ。風聲頻ゆゝ。當下。牧野義順ゞ逆て那地へ。きゝる。間諜の若黨丙丁ゞ帰り来て。詳ふ実を報しゝ。義順ゝ先見義ふ空しゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。又情地ゝ使を那地へまゝ。近年松永久秀と両三好日向守長秋山城守保長岩就们權を爭ゝて矛楯ふ起れる賊徒の内亂ゝ。都下の容を告報ゝ。大旆倘這機を失ゝ。都ふ向いせゝ。臣義順もム行營へ馳參じ禀ゝ。紀ふ内どふ。萬教令を希ふの旅を上野清信ふ就て言上させ。準備ふ遑ゐ紀まで。鎧の袖や楯の端ふも。おく霜ゝ。紀菊月の上澣ふ。義昭美濃を御出馬ゝ。江州へ向ひゆゝと聞えゝ。左馬權少允義順ゝ。譜第の老黨若黨家隷们五十餘名を率ひて軍の首途ゝ。都へ出ゐ。倒ふ路の障碍あれば。若挾越ゝ。近江ふ赴紀。守山の

陣より参上して具足に入り。躰く陣供に加りける。源二郎も猶免
より。供に出陣の伴當に召具へと請乞めしかど。義順いと喜氣に
うち笑みて。幼くして忠孝勇烈の志あるを誉めたくも。汝は尚元服
せざる遊俠の分なるぞ。其由りあれば。這里にあて母雪
の心を慰むべしとて。供に遣はし留めぬ。太る程に平朝臣言長も
山東より名を聞く英雄陸奥将士星の如く人盛に馬強く。近江國より
うち入て湖西を望ておし進む。鋭き勢ひ霜を射て晃光昇る旭
の光り。紅の旗色そひて燃原許の兵鋒神速。支める敵を拉ぎ
向ふ前に敗連戦必勝。威風草木を靡けしかば。仇も亂れて散
ぶ若。蒙るや霧の玉鉾。道拒障なく開ける。花の營とや世に
いひし。昔の夢の跡を追ふ。足利義昭朝臣ほどもなく上洛ありて将
軍に任じ官に亜相に進みぬ。有斯程に逆賊の魁首なる三好
日向守長獲山城守保長岩就主抗助祐道ホ三克も京を去て。
盛に山城摂津の城墨に蟄り或は遠く南海に入もあるに故管領
長慶の養嗣三好左京大夫義継及び松永彈正久秀も軍門に
降ぬを。開儘に免されしかば。牧野義順ある會意如ん縛
と上野清信に憑て。新将軍義昭卿へ三好家の三克と松永陪
隷家臣の身を以て。僭上非禮天下の列侯を欺き剰へ公方家を
犯し奉る。逆無道大辟不赦の國賊なるを。洛を遁て免しぬ
上ざるの[illegible]故将軍のなんを做せるぞ。復讐義兵の名を
違へり。快く松永が首を刎て梟させらるべ。弑逆謀反の罪悪を天下
に暴白やふべしと一通の諫書を上られば。義昭卿諫書の趣理

として。大ふ義順が忠志の親切なるを感ド悦びゆひて受納ちせみひゐり。遽莫登時の勢おのづから。軍政兵權総て。緒田言長の手まあれバゆや。此度功臣諸將を召集へ衆議のうへよく約るべ〻。緒田氏そいふよ及ぶ。在京の諸將士を召れる开人ハ式部少輔一色藤長（丹後國田邊の城主）大和守三淵高秀。伊賀守和田惟政兵庫頭伊丹親興。肥後守飯河信堅。佐渡守上野信良。刑部少輔武田信員玄蕃頭真木嶋昭光ホあり。偖て松永が罪をさゞその一條を議せしめゆふ。三淵一色和田が輩ハ現ふ然るべきあんゆ約りとも。开他の人々ハ同ぜるもあり。又郎坐のあん答ふい憚ゆ由り多ゝ。行藝ともいひ出ぬもあり。伊丹親興真木嶋昭光い退坐く愚按を旋らしゆう。禀上いんとふよ。言長朝臣一坐を佶と見まいらく。各意ふ思さるゝや。將軍の教命まあとふ已むことを。得ざ体あん緯形れども。降を殺せハ不仁ゆり不祥なり。矧てム降を一番剛ー召容られて。先ーゆひーを忽ちふ又誅ーゆいぐ。是信を天下ふ失ひゆふ形り。然許り罪重ゆ。松永を赦ーゆゆ。反側子們が心を安んぜーめて。朔冠を帰伏ー快く畿内を平定まる。國家のあん与ふ良策とおそ。冠えひゐれ。怒るを固く法を執て。刑殺を專らと其。賊徒ホ必死の志を固めて。倒ふ征伐輙ゝ〻ひん。と利害を揣く名義を後ふー。權謀を要とせー。覇道の議論ふ。列坐將士現りと思ふ者ゆあり。心ゆ伏せぬ人々も。足利家の幕府を再興ゆる。義戰の盟主とーて大功ありー言長の權ふ憚り威ふ畏れく共侶ふ爾臺（言長時ふ殯正忠さり故ふ）徳ゆの宜ふ所い才短ゆ在下們逮ハ心ゆ憑ぢりーゆ。這亦至當の

要論あり。怠さば苟且他を赦免あり。近畿八一く定るの時まで。他ふ
れ他う頭顱を領け錯せぬひあば。一雲妄あそあれ後来い復驕僭のるみ
ぬべ。开时ム衆を譴責て誅しゝみゝと。晩くそいいどとぞ答へる。現ふ
戰國の習俗ある。當時の人情相恐像べ。有如右程ふ衆議あれふ一変
きそ。義昭卿のゝん心ふ陸せ難られて。惜むべ遂ふム縛ゆれ
ぎて。然しゝ牧野義順が忠肝義胆の諫書ゝ。徒らふあそありに
れ。途べ義昭ゝ教しゝぬ江湖上を。悄々地ふ嘆息ゆけるゝ迹後
将軍家の昵近衆と。緒田の部將共侶ふ。賊將岩就三税助祐道
ゝ據らくる。青龍寺の城を攻しと紀。義順ゝ昵近衆の隊ふ加り。
家隷ホを励まて莫先ふ找み衆ふ抽戰ひりゝ。城遂ふ隨り
て。岩就ハ殉兵を園陣ふそゆへ。手ふ一丈有餘の銭棒を含さる。

馬上の坐長いと昂く。左右ふ生られる鬼髭の凄ちげる面魂の
四下をはゝふ殺氣克悪雷の霹靂く許り。寄隊の陣へ驅入りく。
件の棒をちも輕ゆふ輪々と風車の若ふ輪揮し。一棒ふ三名五名を
撃ふせ。人をも馬ゝも逃みゆく。鄭ふもまでふ死骸の算を亂して
撃殺し。足利緒田の諸隊將の圍を衝て血戦ちる主ふ後ゆぬ猛
者剛卒の妻かる中ふ祐道が武門の二王と日属ゝり世人ゝ説も誇り
て。憑み思ひし老黨ふ石持力四郎暴雄金挺小練堅治。ゆど呼れさ
ぬ勇士を頭人とゝく。羆ふ奔し紀武者百餘名。勇を奮て殺奔し
鋭鋒ふ瞬く間ふ重圍を馳脱て。濁れる蹴をし。晦悪ふ
蹴起る塵。芥川の城を望てぞ走けるを。怕れて追ふ者ゆりしを。
いふ甲斐ゆし。牧野義順。ゝが隊兵ふ告示して。岩就ハ義輝公

を鐵奉り。四老賊の隨一人形をば。這しかぜを。と称隷郎黨五十餘名を左右ふ率〳〵砂塵を揚て驀直ふ趁逼りる。義順が本日怎生る打扮ぞ。貂ふい好菓子身甲の紋の色や葱緑ゐる。甲裳長ふ穿下して。細目綱鎌の臂縛ふ。鐵板の篠脛衣。透ゐりれくとり領ひて。紫金裝の大刀を佩び。背ふい二十四挿る征箭を。苦高り翼ゐしる服ふ薫る梅形して。紅梅鴨毛の馬を腰鞅して。胡意と盛を着ざりる。面ふ溢ゐく勇威凛々。鈴々と轡の响も勇ましく。声言やりよ。逆賊祐道。那里ゆのでゐ逃んとするや。故將軍の奉鳥よ。牧野左馬權少允義順が。怨恨の返し箭受てんよやゐと呼ゐて村重藤の弓ふ箭をうち刺ふる那方ふゐ。岩就酷く敦圍ゐ。噫面倒ゐる暮蠅们。驅拂ゐれても懲ぜよ。辭来て馬の尾ふ附

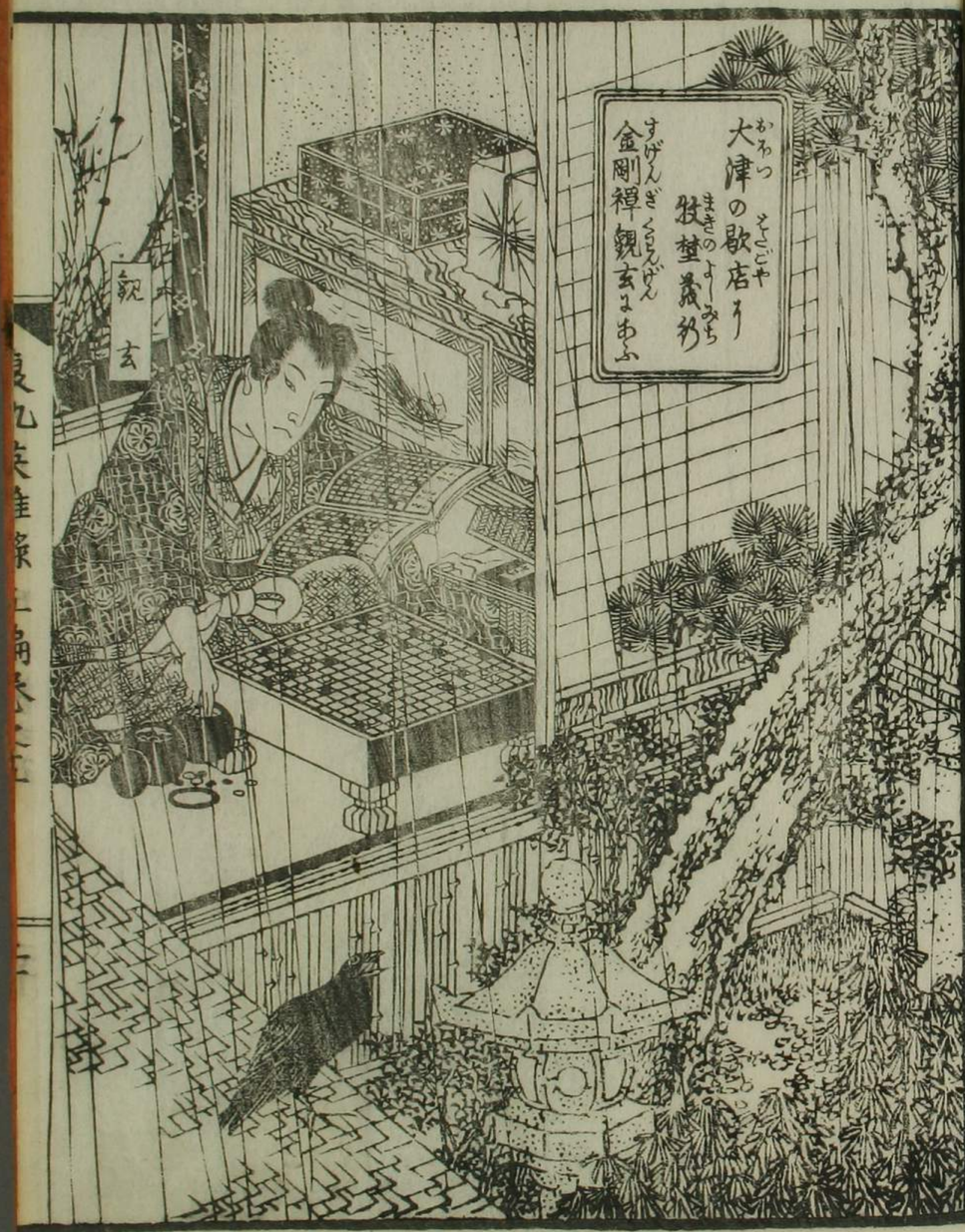
やゐ。いで衂すて躁躙んと大返しいふゐのふ。咄〻喚て駈んとゐ形る。前路ゐよりと義順が克弯固めて発矢と射るゐ。老華の岩就主税眼快くも冈一冈とム躯を躱避る。那時晩し這時蚤し。馬ゐの腕を肩拳外ゐふ。後方へ通と鏃白くぞ貫ゐる。痛痍ふ有係の祐道も。馬より噎と倒ふ。墮ゐと得ゐると牧野主復。首級を獲んと蒐よるゐどふ賊兵大家肝胆を落し。蒙痍の主を勦う援て。游び馬ふ杠騎せゐ。狼狽誤て逃ゐるとゐ。逃げじ〻れと趁蒐ゐ。去向を遮り支ゐる。石持力四郎。金挺小錬。隊兵共倡一歩も距ぜ戦ふゐどふ。這们が手ふ義順が。若黨雑色五六名。矢庭ふ撃れて戰没ゐれば。義順嗔りの歯を噛响し眼ゐ睜り。這奴ホぶ与ふ祐道を捉遯して。ゐぶ兵们をいうて。ゐ麦く撃ゐべゐと。仲間ふ持せる雙枝槍を抓含て。石持暴雄と

相對せし。一往一來電光石火と突出も迭ふ修錬の槍尖も。石持る稍腕臂衰へ槍法紊れて。人々目危く傍より。金挺小錬躍り出て脚底より。沙を蹴起る戰鞋も。踏裏を力足ふ敗草鞋ふるあり。斷絶れて做ん眉尖刀を。晃々たる眼球あを、向うけれ。頬髭も赭黒く。現ふ金挺の鐵鏑声ふ石拍ぬ。援よ出と。孤忠れそ。両個で撃よ。足らぬ奴ふ。みなれども。主公ふ前創を被せ。歃おれば。和殿獨が鬼食せんより。俺ふも功を分ち給へ。贈ふ砕碎て甘心せんと。唱たよ喝て撃いい眉尖刀を。早速の義順潛で透し。透さば深出を雙枝槍の。右ふ當りて五十餘合。敵と船方の両軍ふ目を驚ろかし奮激突戰ひと喚て力四が槍を拂ひもあへず。胸前より背へ馬鎗と鏑串され。呑と仰反る石持が醫餅春て倒れる。鏄間を淳

りと金挺ふ。眉尖刀より延べ義順が左の肩を斫着れど。淺創かれば緯ともせず。再び冈く尖児より肋丁ど。鎩れて捽礼跌走る。小錬い壷て死てゐる。牧野が郎黨若黨ふ。是より機を得て一斉ふ哄と興をつげ。不管三七二十一ふ斬崩せば。岩紋が殘卒大ふ敗れ。散乱まさる水葉武者。如く秋風より飛ごと。主の心も濁る水。芥川へぞ逃亡る。義收ハ岩紋祐道を。好み編くるを大遺憾く。思よりの〻。妙兵の單隊も。ム退口を斬壞し首級を獲ると十三級生口を五名ふ。船方も傷痍兒多かりしれば。船冠い追べらべと馬を迴して諸將より從ひ。一旦都へ帰陣去ける。恁て都下の靜ふ。忠懇功勞の將士ふ各恩賜賞禄あり。義昭卿牧野權兵ゞ始終の忠志。と今番乃戦功を深くも感じ。山城摂津河内の各処ゐる。御領の内ふ

て若干貫の采地を加恩あり。尚开他種々の賜ありて。另の服をきへ
みりしい這秋月の下瀚あるべし。都を出て玉鉾の路の去向に流覧
けへ。楓り櫨も山々は紅を日ふ曝れ。錦の衣を故郷へ耀うしてぞ帰
りける。岩鼠いはねより海六年ふ丁る天正元年の秋緒田のさあり滅ぶる
永禄十年ふ天正五年ふ織田よ殺されて亡びう各山下ふ話説ー　栗下某
生再説牧野長濤義彩ふ曩ふ左馬允義順と兄弟の間疎
くありしう。快くも四年ふ彩りふる。今茲永禄十八月の中旬ふ那
賤配の妻岩瀑ふ近江ある石山寺の月を翫せんとて。一婢両僕
を伴当として人船も侶ふ那処ふ到紀次日ふ瀬田よ遊びて帰
保ほやうる。黄昏迹くありて大津の驛ふへう。よ紀歌店を索ゆく
宿りる。その詰朝より雨降り出て止ずければ。女児们を辛て徒
る日ふ。泥滑路をたどりんも要ふ。とん仍ふ信宿て在ふる。不

樂しき涯ありける。登時那方の一室よも。厮宿の客あると覚しくて。
棋枰ふ墮る碁子の响れ丁々と間迹くハ聞ゆれども。いと蕭然まく
晤譚ありもあれどふ殿衛ハ訝り紙門の支合少し開紀ー間より。
心とりあく那方をバ。但見バ一個の金剛禪あり。額鬢ハ艶やかして
天鵝絨の若生延るを拑着ー。髻結繁く纏立ー茶筅髻を扁
々ー前ふ統ゆる。齡を三十有餘あるべく。面色皎くして眼見清く。
準頭隆て鬚青う。六郎が蓮尚馨あり。張生が柳いまざ老ざ風。
眉目廉ーあれども氣昂紀人品自然ふ威ありて卑陋かるバ。另ふ
い素練の襦ふ水色湖紬の小袖衣を着て深鐵色紋紗の道服を
被りる。戒刀柄ふ朱漆ある刻鞘の刀を佩て傍ある刀架よ黒金装
の大刀を架け。摠撒金ふ描做る多匣の上ふ綾の銷金の輪袈裟を


大津の歌店
牧墅義行
金剛禪觀玄
觀玄

野義行
山石さた
屋清

暦て。獨り碁枰ふうち對ひ。右手ふ両箇の棋子盒を索り。左手ふ一冊の棋經を擎げ閲つ。復た以て迭更ふ黒白の碁子を盤上に按排べてぞ居らりける。這亦両窓の徒然なるを慰め難し人を れと思ふあるさも朋欲ふ圍碁い平生嗜ゑ技の。技癢ふ禁ね べ義ゑ。そうち咳て隔の紙門をおし開き。白地ふ那金剛禪ようの いひ被て。西家い丹波の田舎児ふ侍り。ゐん身を那里の所坊ふ在ら も知らぬ。言卒ふよい侍るめとど。諺よる旅い彷徨。世い情とやら ん。恁鬱陶し紀旅亭の秋雨ふ日暮も宛ら長く覚えて堪ら ら。然る時ゐるふ獨り。呑盤を友とゆふい。然あそ這技の達人ふ 所座ら免。在下もまさ那諺ふいふる。低手の狂嗜ふ侍り。婦女们 をさへ伴ひ。旅次の座席の醜れを嫌いせゆ比光陰ありて一局の

輸贏ふ君がよくも請ゆふ葛城大峯の像ゆ。高き姿を示しぬい ぬや。然あ〜ば十六夜迄る。人う宵の月ふ缺もゆ。今朝る雨も晴ゆく 仏地ふ奥あるべ〜年ゝと誘へば。那修験者い遑く。輪袈裟を食て 襟ようち被。這方へ向て礼を返し。貧道ゆ出羽國羽黒山の優婆 塞ふて。月光院の觀玄と呼る者よ侍り。現る一樹の蔭ふ宿り。一河の 流を汲む。も他生の縁と申ん。不測の奇遇。意外の佳招い旅中の一興。 好意い悦び入さ比へども。内室ゆる欲ゆ今愛ゆる欲ゆ知らぬ侍れど。閑 秀達も在ゆ。一席へ道服異体の行者ゆ。推參せんい無礼の ゆ 悍あり。と推辞を義ゑ抑留ゆて。夫いまさ要ゆ紀遠恵ふ侍り。 ゆ伴ひつるい前妻と侍女よて。這方ふあそ無ゆんを悍りぬれ遮 莫私の同舟旅の厨宿。何ぞ誰彼を問ゆ賓主を論ぜぬ。お解て

囲碁を以て譚ふ互に憂悶を慰む形れと理なるも遠方乃
座席へ誘ひぬ進み出岩瀑も初見の口誼愛々敷く侍女して菓子を
供し茶を薦めぬ徒に義弘は觀玄に接ふ。那隣席へ行き
碁枰を進み次房に居し一名の隷僕して這方へ搬ぶ迄の辞譲ひさの如
義弘終に碁子を食べ觀玄白子の盒を食て。躰て棋枰に對ひ
ゲ含笑みて。徒禀さび貧道いと心鄙陋のと思ひみるんが圖碁みを
賭のある習俗なれど。苟且の遊戯に如右せんと要形紀繹なれ。然れど
貧道初ての見参に仕れば君ゲ盃を賜りてんふぶ東儲に勝負に拘ら
ば。貧道に委せ給へ。と云ふ義弘頭を掉て。爭ふ東態を他に委ね
べ。這いそぢもの繹形。と答るを。觀玄只管に貧道みうち信し
ひ給。と嘗響して飯店の婢を喚ちぶけて。快く美酒佳餚を這里

へ出し給と吩咐ひ婢は含羞阿唯々と応と侶に船を記し庵福の
方へ退り行る徒て義弘は觀玄と坐隱の戯を試る。觀玄ゲ段乃
高妙なる及ぶくもなく覚えしに心あり。胡羞互角に圖み給。結
局の勝を譲りて牧野に取せ。時に飯店の婢が搬運来る銚子盃と
一双の塗折敷に種々の酒餚按排しを多逸迂く置暦れば。觀玄は
義弘に對ひて。無礼に仕まど貧道が東人態に毒嘗侍ん。允しに
へ。このひ。那婢に酌せて。散乱離と喫了る。盃を盃に水に濯
て厦湯に献よ。主客の口誼り温柔に稍うち釋て山石瀑に侶
に盃を交せ初々敷く交ぜり。觀玄游て義弘に。ん伴當の然
も退屈ひ給れぬ。苦くば召みぜや。と侍るに義弘は岩瀑
共侶。親玄に歓びをのべ次房に在し両名の伴當を喚で戸川際よ

う找まきて。鄉より汝們い所はゝん。其の方さゑい羽黒形る月光院の大
人よ西座を形るぞと告示る微醉の顔ゑ笑作向て親玄ゑ對ひ院主
商せ那い給喰栖三十勅。與々若黨よて。酒家如妃甲斐ゑ紀著ゑ役
使ゝゝゝふ草深き田舍ゑ住めど。野夫るも剛の兵ゑて武士ゑい来錬
来曾有の男ゑれども。風流を好て都人ゑも。恥ぢと思へと大胆を敵も。
林藪營るの歌を詠とゝ。この紀師ゝも就ぢゝて。おのれと轉る器用人ゑ
侍り。又這ゑ豆平と喚ゑゝる。這赤色ハ熱られど心ハ風流の恋紀
うなる。業平知居ゑも必ら〻ば。美女在とゝ吟ば河内いゑる海外る國
ゝも。漂蕩ゆんまめ男ゑゑり。ゑ〻月賜り祐といふゑん。傷吟せる
盤石瀑い侍女ゑる俱禁かゝて。齊一ゑと笑ひる。這画未竭ゑゑよゝ次巻ゑ説。

傾雙巖岩見英雄録第五輯巻之五 終